

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

'97年 4月号



新保育デザイン12か月（第二集）

ワイド判

園だより・クラスだより・行事だより 文例・イラスト・囲みケイ

1



4・5・6・7月

2



8・9・10・11月

3



12・1・2・3月

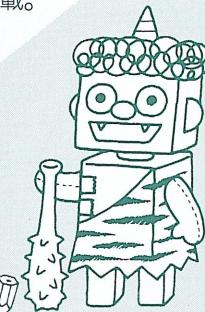
おたよりを読みやすく、魅力あるものにするための本。

園だより・クラスだより・行事だよりのレイアウト例、自由に使える
囲み枠、飾りケイ、ワンポイントカットなどを豊富に掲載。

B4判なのでそのままコピーして使えとても便利。

忙しい保育者には必備の書。

おねがい



新刊

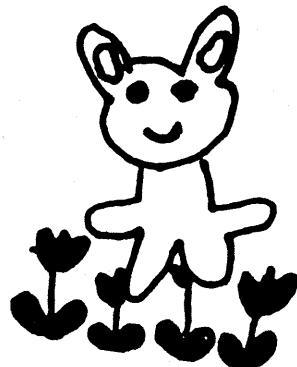
阿部 恵 編著

B4判 96頁 定価各2,136円（税別）

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第96巻 第4号



幼児の教育

—第九十六卷 第四号—

目 次

© 1997
日本幼稚園協会

- 二十一世紀にむけて幼児教育を考える(12) こころ豊かに暮らせる世界を
一人と人との豊かなかかわりの上に―― 黒川 建一 … (4)
- 揺らぐ心と洗われる心…… 鍋島 恵美… (9)



- 子どもの生活と福祉の歴史(1)
養育院育児室の子どもたち―貧困と家庭崩壊のなかで― 松本 園子… (16)
- 現象学から保育の世界を見る(1)
園空間に住みつくことと他者のまなざし…… 榎沢 良彦… (24)

身辺雑感—私がかかえている葛藤から—…………津守 真… (32)

ある日の育児日記から(76)…………佐藤 和代… (38)

震災後の子どもたち(5) あのときの…………田辺 克之… (39)

あそびはらっぱものがたり…………すとうあさえ… (44)

保育現場と学問の交流の中で—一九七八年・お茶の水女子大学児童学科

現職研究会の学びの中から〈その二〉—…………長山 篤子… (52)

お母さんのまなざしとケンの日…………吉川はる奈… (58)

表紙絵／小田原千佳子

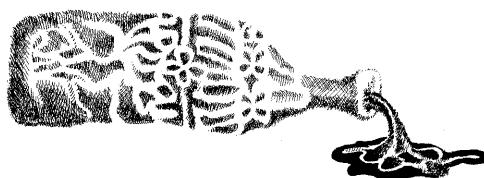
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「のどの渴き」

編集委員／田代 和美・伊集院理子・上坂元絵里

編集部・仲 明子



「豊かに暮らせる世界を

——人と人との豊かなかわりの上に——

黒川 建一

最近は鉛筆を使わなくなつた、そういう主旨の評論を、確か新聞で見かけて切り抜いておいたはずだ。それを思い出して搜したが、見当たらない。代わりに、サイコロのように使って、しかもレースカー型の消しゴムをはじく仕組みのついた（ミニ四駆レースカーエンピツ）が子どもたちの圧倒的支持を得ている、という記事の切り抜きがあつた。

自分が小学校の頃、鉛筆の六面を削りサイコロ代わりにしていろいろな遊びに利用した記憶が思い出されて、ついそこに考えが留まってしまうのだが、自分が話題にするつもりでいたのはワープロのことである。ものを書くのにワープロを使うようになつて、たぶん七、八年になるだろう。それ以来、鉛筆はほとんど使わなくなつた。

ワープロで打った原稿を、FAXで送る。

必要な時にはコピーをとる。どの手段も、以前には予想しなかったことだ。しかも、そうした手段さえ、インターネットという新しい波の前では時代遅れのものにみえる。

*

「世代が変わる 家族が変わる……意識が変わるもの タブーが変わる……ルールが変わる 教育が変わる 遊びが変わる……境界が変わる……距離が変わる 関係が変わる……形式が変わる メディアが変わる 言葉が変わる……文化が変わる……」

引っ張り出した切り抜き資料の中に、この

ようにして二十六項目の〈変〉を並べた全面広告（朝日新聞社・日本新聞協会）があつた。

私たちの身の周りで、さまざまなもの」とが目まぐるしく流動し変化している。それ

は、目まぐるしく新しい何かが生まれていることであり、同時に、目まぐるしく何かが消え失われていることでもある。

いつの時代にもあったことだけれど、よく言われるよう、いまは、そのテンポがあまりにも速い。そして、当然のことながら、変化するものとの内容が問われる。ワープロは、便利さをもたらしたばかりでなく、特定の技能の持ち主でなければできなかつたいくつものことを、普通の人にも可能にさせた。そして引き替えに、その人の手仕事のぬくもりや、その人らしい持ち味を、他の人に伝えてくれさせた。

私たちの身の周りの、さまざま面での変化の根底には何があるのか。変化の軸は何なのか。私には、そのとらえようがわからぬ。これから先、私たちは、新しい何を生みだし、これまでの何を失うのだろう。

*

二十一世紀に向けて、またひとつ、新しい年が明けた。新聞の紙面には、今日に至る繁栄の流れを受けて、人間や社会の未来を明るく展望する内容の記事が目につく。

私も、そのように未来を思い描きたい。しかし、そうするには、ひとつ努力をしなければならないよう思う。日常生活の中で溜め込まれてきた私の実感が、素直にそういう願いへとつながっていかないからだ。

日常生活のいろいろな場面での経験を通して、しつこく私につきまとう実感は、人間関係を好ましくつくることの難しさである。もつとわがままな言い方が許されるなら、周囲の人への目配りが薄れていくよう思える、今の世の中の状況に対する不安と不満である。

かつて、私は、それらを若者世代の問題だ

と思っていたが、この頃、そうではないと思うようになった。むしろ中高年の世代こそ、その先駆けだつたのではないか。そして、いまは、幼児たちにもその気配を感じる。

切り抜きの中に、車内の座席をめぐるトラブルや、エスカレーターの乗り方をめぐるトラブルの記事がある。「罪悪感薄れる子どもたち一人前でポスター盗んでも平然」などの、人目をはばからない若者たちの行為を話題にした記事もある。傘やバッグの持ち方、他人の目の前の横切り方、話し声の大きさなど、自分の感覚からすれば腹立たしく思える体験と重なつて実感が増幅される。それは、さまざまなものごとの変化のなかで、私にはいちばん気がかりな変化の実感である。

*

ものごとがどのように変わつても、人が、他の人たちと一緒に生きることが変わらない

かぎり、周囲の人たちに目を向けることの大
切さは変わらない。世間体を気にするよう
な目ではなく、他を同じ一人の存在として認め
る目がなければならない。

受験勉強や仕事に、時間のゆとりも気持ち
のゆとりも奪われ、便利な道具だけが溢れる
生活の中で、多くの人たちが、他の人たちと
の関係を軽く浅いものにしてきたのではない
か。特定のものごとの値打ちにだけ关心を奪
われて、よほど愛着を感じる人が、さもなけ
れば利用できる人以外は、意識しなくなつて
しまったのではないか。そして、自分がそう
であることにも気づかないようになっている
のかもしれない。私自身の振る舞いに、その
ことを知る。

人と同じに向き合い、じかにふれ合う体験
を、もっとだいじにしなければならない。も
う少し広げて言えば、周囲の物と同じにかか

わり、自分の手でじかにものを生みだす体験
も、もっとだいじにしなければならない。そ
れは、自分の存在を確かめる体験である。そ
して、他者の存在を知る体験でもあり、他者
との関係を創る体験でもあるだろう。

幼児期の子どもたちから、その体験の機会
を奪わずにいてやりたい。二十一世紀に向
けた願いであり、今の願いであり、いつも変
わることのない、あたりまえの願いである。

*

二十一世紀に向けた幼児教育を考えること
は、「こころ豊かに暮らせる世界を創つてほ
しい」という私たちの願いを、その世紀に生
きる幼い子どもたちに託すことである。自
分のためばかりでなく、若者たちや幼い子ど
もたちのことを考える時、その願いは強い。
雑多で混沌とした変化のうねりから、その
先を予測することが、私にはできない。しか

し、ここに豊かな暮らしのいちばん根底に、周囲の人たちとの豊かな関係が必要だということは、間違いないと言える。豊かな関係は、他者の存在そのものを認めることで成り立つ。それを支えるのは、自分自身の存在の大しさを感じ、その思いをしっかりと胸の中にたたみ込んでいく体験だ。幼い時期、自分のすることを周囲の人たちに温かく受けとめてもらえる、そういう体験だ。

「どろんとした空気が、私たちのまわりにある。停滞。日だまり。踊り場の一服。先が見えない。ふつうの人のふつうの暮らし。さて、どうしよう。自分にこもる、うずくまる、群れにはぐれる、道草をはむ。人はいま、牛になる。……学校に行かず、仕事もない。駅のコンコース、コンビニやファーストフード店の前の路上に十代の男たちがべつたりと座り込む。自分のことを『ブー』と呼

ぶ。……どの街にも、ブーが座り込んでいる。自分が座った床のすぐそばにつばを吐く。ベルが鳴る。ゴミをボトント落とす。天から音楽を聞いたように、時折、ダンスのステップを踏む。来世紀、彼らが大人になる」（朝日新聞「牛になる」一九九七・一・三）。

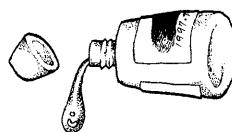
自分の存在の大しさを一所懸命に感じ取ろうとしているであろう、この若者たちが、ころ豊かに暮らせる世界をみずから手で創りだす世紀になつてほしい。そして、同じ願いを、幼児たちにも託したい。その願いは実現するだろうか。

私たち大人が、それぞれの若者や幼児の、人としての存在を本当に大事にしながら彼らとかかわるように、自分を変えていけるかどうか、それが最初の鍵だと思う。

揺らぐ心と

洗われる心

鍋島 恵美



せんせいさま

四歳児・五歳児と担任し、久しぶりに三歳児を受け持つことになった一九九五年四月。家庭的な雰囲気と明るさと優しさを大切にしようと保育に望んだ。気分一新、私自身も淡い色の洋服と、フリルの

付いたエプロン姿に変身した。少しオシャレをしたのだ。装いは心まで変えると言われるが、まさしくその通り、今まで五歳児と共に活動的に動き回っていたのと違い、小さな、動きのゆるやかな三歳児との生活は、優雅でゆったりした心地で始まった。そうだ。気分一新、私の周りに吹いていたのだろうか。「先

生様」と、私に呼びかけてくるM夫（新入の四歳児）に出会った。

保育者になつてこのかた、初めて呼ばれる『先生様』、その言葉の響きに、一瞬戸惑いを覚えた。こそばゆくも感した。と同時に、そう呼ばれると、背筋を改めてスーと伸ばさなくてはいけないような緊張感と、からだに走る清涼感とを味わつた。不思議な感じだが、心がさわやかになつていくのを覚えた。そして、いい気分でもあつた。

一方、M夫の担任は、それどころではなかつた。彼は、アレルギー体質が強く、自分のからだに合わない物を口にすると、ショック状態になるという子どもだったからだ。

私共の幼稚園は、自由な保育であり、五感を通して環境に働きかけることを大切に生活をしている。園内には、飼育物や栽培物も多く児童自らの手で世話をし収穫をし料理をして食べることが、日々の生

活の中でごく自然に行なわれているのだ。それ故に、M夫に対する担任の心配

りは大変なもの



だつた。ところが、担任する学年が一つ違うだけで、距離を少し置けることが、M夫に対する私の関わり方に、ずいぶん心のゆとりをもたらした。三歳児の子どもも、「お兄ちゃん」と、呼びかけて、まごとをしたり、誕生パーティーをしたり、絵本を読んだりと生活を共にした。四歳児の保育室の中とは違つた表情のM夫だった。朝「おはよう」と、登園して持ち物を整えると、三歳児の保育室へ来るのが彼の生活の始まりだった。四歳児一クラスの人数にくらべると、ほぼ半数程の人数で、動きや声のひびきもずいぶん四歳児の室内とは違つて穏や

かである。その雰囲気も家庭から入園してきたM夫にとつては、心地よかつたのだろう。そして、安定して人と関われる所が、三歳児の周辺だったのだと思う。

M夫の担任と連携し、私達保育者間では何ら問題はなかつたが、三歳児と過ごすM夫の生活を観て、彼の母は、「同年齢の仲間の中で遊ばせて欲しい」と、担任に申し出られたり、「我が子より小さい年齢の子どもと遊ぶことが、発達を阻害させるのでは」と、不安を訴えられたりした。私達の指導の方針を理解してもらえるまでには、ずいぶん時間がかかり、それ違うままのところも多分にあつたようを感じる。

いつの頃からか、「先生様」という呼び名から、誰もが呼ぶ「先生」という呼び名に変つていった。自分の持つて生まれた体質も関係して、大切に保護されて育つた家庭から、幼稚園といういろいろな育

ちをしている人の中につつて、彼自身が感じ獲得していくた呼び名の変遷なのだと思った。

さよなら

M夫が五歳児進級を迎えた一九九六年四月始業式の日。横に座つた私に、「さようなら、僕は、大きい組」と言った。余りに唐突な一瞬の言葉に、驚いた。が、「大きくなつたんだ。彼の自立、宣告なんだ」と感じた。そう宣告することで、自分にも言いかせていくよにも思えた。彼のその成長ぶりを素直には喜べなかつた。それは、言葉の表現として淋しく冷めたさを感じたからだ。私は、「さよなら、またね」と、別れる言葉だけでなく、「遊びたい時は遊ぼう」という心の思いをつけ加えた。人のつながりといふものは、そんなにサッパリと切れいくものではないということをM夫に伝えたかった。私の心は、日本人的、浪花節のかもしだれな

い。私も新たに入園児を迎へ、今度は四歳児の担任になつた。

かいぞく エミ

夏休みが明け、九月に入つて園庭に出でていると、「鍋島先生、遊び」と、声をかけられた。久しぶりのM夫からの呼びかけだつた。「やあ！」といふ思ひと、「どうしたのかしら」という思ひが、私の心中で一瞬交錯した。そして、「いいよ」と返事をした。「海賊船」のことよ。あのね、僕はフック船長。先生は何になる？」「そうね……私は“海賊エミ”になる」と、言葉を交わし、ジャングルジムを海賊船に見立てて遊び始めた。「海賊エミ先生、敵を打て！！」「えっ、私は海賊エミ、フック船長」と、私の呼び名を強調した。すると、「海賊エミさん」となつた。彼の心の中の葛藤がわかるような気がした。M夫の育つてきた生活の中では、「先生」

という価値観は絶対的なものだったのだろう。先生に対して、遊びの中であつても、本人を前にして「海賊エミ」と呼び捨てにすることに抵抗があつたのだと思う。

私達の遊ぶ姿を見て、我が四歳児の子どももやつて來た。「何してるので？ 寄せて（入れて）」とS夫やT夫が声をかけて來た。「海賊船ごっこよ。この人が、フック船長。私は海賊エミ。フック船長に聞いてごらん」と、五歳児のM夫と四歳児の彼らとの仲をとつた。「いいよ」と、M夫の返事。その時から、私を核にしながら、M夫と四歳児の遊びが始まつた。

M夫の母と話す機会があり、彼の遊びのイメージが、夏休み中に好きで見ていた『ピーターパン』のフック船長であることがわかつた。それから、毎日海賊船ごっこが始まつた。『ピーターパン』の絵本を何度も一緒に読んだ。大きなダンボール箱をつな

いで、海賊船を作つては遊んだ。

雨の日、テラスで遊んでいると、振り込む雨の水しぶきがかかり、まるで荒海の中を航海しているような気分だった。「波がきつい。船に水が入つて来

た。氣をつけろ」「わかった」「面舵いっぱい」「あっ、水が入つてくる」「みんな、船の中にもぐれ」。ワーキャーと、M夫・四歳児の子ども達・私といろんな声が重なりあつた。そして、とうとう



▲いちょうの木の下を海に見立てて

その日は、雨でダンボールの船が濡れボロボロになつた。本当に難破した船のようだつた。そして、みんなでその残骸を「ヨイショ、ヨイショ」と、消却炉まで運んだ。海賊船乗り組員みんなの力が一つになつてゐるのを感じた。この頃になると、M夫は、「海賊エミ」と自然に呼ぶようになった。

ある時、M夫のクラス仲間のN夫達が、やつて來た。

やつて來たというより、押しかけて來た。M夫の表情がこわばるのがわかつた。N夫達は、○○マンになつて海賊と戦うつもりなのだ。四歳児でも体格のいいA夫が勇敢に戦い始めた。私は、おびえるM夫に、「フック船長、ここは逃げよう」と、つれ出し、便所に隠れた。しばらくして、「様子を見に行こう。Aちゃん大丈夫かな?」と出て行くと、A夫がワーウーと泣いていた。そばでなぐさめているK保育者から、「みんなが逃げた後、Aちゃん一人で戦つて、やつけられはつたのよ。かわいそうに」と、後の様子を伝えられた。私は、「ごめん、ごめんね。Aちゃん、悪かつたわ。今度からは逃げないから、ごめんな」と謝った。その場の状況を察したM夫の顔もすまなそうだった。五歳児と戦つたA夫の姿と、私の姿を見て、M夫の心は揺れただろうと思う。

毎日くり返して遊んだ海賊船ごっこ。四歳児の生



▲海賊船に乗って

活の中にもすっぽり入り込んでいた。十月、運動会を迎える頃には、海賊船に乗って出かけるという表現へと高まつていった。

その頃、四歳児のS夫やT夫達は、M夫の姿をみつければ、「フック船長」と、声をかけるようになつていた。そして、M夫も「やあ」と手をふるような“関係性”がでてきた。

あの人、一緒に遊んでた人

それから、またバタッと四歳児の保育室に顔を出さないようにになつた。そんなある日、五歳児の仲間と楽しそうに肩を並べて歩くM夫と出会つた。その時、久しぶりに同輩との笑顔の彼を見たので、うれしくて二人の肩が入るように両手を開げて笑顔を投げかけた。すると、スーとその横を通り過ぎ、その友達に「あの人、と一緒に遊んでた人」と、話しているのが聞こえた。「前遊んでた人」と、その例え

ようがおかしかつた。と、同時に、「なる程なあ」と感心してしまつた。「そう言葉にすることで、友達と、同じ所に立てるんだなあ」と思つた。「これも彼の自立、宣告なのだ」と理解できた。

いつも、ふと考えさせられる言葉を残していくM夫。クラス編成やクラス担任の枠を越えたM夫。その自由な保育環境の中で、私に語りかけてきた彼の言葉そのものが、彼の揺らぐ心のように思える。その心を通して、私自身の心が揺らぎ、ときどき澄まされ洗われていった。そんな彼との出会いだった。彼の言葉に感情が伴つてきた時、その航海が豊かな旅になるのだと思う。私は、M夫にとって“海賊エミ”でいたいとおもつていて。

(京都教育大学教育学部附属幼稚園)

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ 子どもの生活と福祉の歴史(1)

養育院育児室の子どもたち

——貧困と家庭崩壊のなかで——

松本 園子

さまざまな環境に生きた歴史のなかの子どもたちの周辺について、これまで私が調べたことを中心に、六回にわたり紹介していきたい。まずは今回は、貧困と家庭崩壊の中で、最底辺の生活に喘いでいた養育院育児室の子どもたちのことから。

養育院と育児室

池袋から東武東上線で十分、物価の安い庶民的な街大山に「東京都養育院」がある。広い敷地内に老人ホーム、老人専門病院、老人問題研究所が立ち並び、いまや老人福祉のメッカである。

しかし、一二〇年余の歴史をもつ養育院は当初から老人福祉中心の機関であったわけではない。明治五（一八七二）年に浮浪者収容施設としてスタートして以来、行き倒れの人、棄て子、貧しい病人、障害者、と様々な人々を救護の対象としてきた。

初期には子どもも大人も一緒に収容されていたが、しだいに、子どもは分離され、子どもにふさわしい処遇がつかは養育院の機構からはなれ、都立の養護施設や教護院となつた。なお、精神薄弱児施設は現在も分院としてある（詳しくは東京都刊『養育院百年史』）。

「育児室」はこのような流れのなかで、昭和八（一九三

三）年に、開設された。それまで、成人施設内で看護婦の世話を受けていた乳幼児のために、独立施設が用意され、その後保母（戦前は、幼稚園の保育者をこう呼んだ）も導入され処遇の改善がはかられたのである。

子どもたちの背景

育児室には常時数十人の乳幼児が在室していた。入院の理由は表のとおりで、疾病、負傷、といった子ども自身の状況を理由とするものは少なく、大部分が扶養者の何らかの状況、都合によつて入院していく。

扶養者については、まず不存在の場合がある。棄児、遺児、迷児は、いずれもこのような児童であり、育児室



児童の場合、多くは棄児である。棄児は例えばこんなふうになされ、養育院にやつてきた。

例 1 男児（昭和八年八月生後二週間で発見）

東京駅降車口三等待合室で、生母とみられる二十七、八の女が、本人を寝かしたまま便所に行くと称して去りその儘戻つてこなかつた。程経て隣にいた婦人が発見し、丸ノ内署員に届出で検査すると「商売に差支へるからお慈悲ある方の手でお育て下さい」と書いた置手紙があつた。直ちに棄児として犯人手配とともに方面事務所に引き渡した。救護法により麻布区内の婦人共立育児会に収容されたが、その後養育院に収容替えされる（『東京市内における棄児の調査』（昭和一二年刊）掲載の事例を要約 例 2 も同じ）。

例 2 女児（昭和十年十月生後一か月で発見）

本人の生母と思われる女が、四谷区新宿二丁目の産婆を訪ね、貰つてくれる先の斡旋を頼んで本人を預け、そのまま行方をくらました。産婆宅で

もらした言葉から、私生児らしい。産婆宅より警察に届出。警察は遺棄者を操作したが発見できず、四谷市民館へ引渡した。市民館は救護法により養育院に収容したが、本人は収容後三か月で急性肺炎のため死亡。

次に、扶養者は存在するが、自力で養育出来ないという場合がある。このうち「扶養者の無資力」というのは、貧困等のため養育困難で、児童のみ養育院に託すといふものであろう。「携帯児」とあるのは、扶養者と共に収容される場合で、行旅病人として収容された母親の同伴児である。他に、父子家庭の父が病気入院したため、育児室に収容された子ども等、様々なばかりがある。昭和十三・十五年にここで保姆として勤務した高橋寿美氏は、「乞食狩り」で扶養者とともに収容された子どもについて次のように思い出を語つてくれた。

乞食狩りというのがありましてね、乞食と一緒に子どもがトラックに積みこまれてくるんですよ。子どもが一緒にいるとき食も美入りが多いわ

表 養育院在院乳幼児の入院理由

	疾病・負傷	扶養者の死・失踪	扶養者の無資力	棄児・遺児・迷児	携帯児	院内出生	その他	計
昭和10年度	1	18	37	44	20	7		127
11	1	5	65	55	31	4	1	162
12	6	10	55	41	25	8	10	155
13	11	20	40	45	13	5	18	152
14	1	6	27	46	19	3	1	103
15	6	14	42	36	29	3	4	134

注>昭和10~13年度は各年度養育院年報、14~15年度は東京市政年報により作成

けでしょ。だから、お父さん、お母さんだか本当の親だかわからないけれど、そういう人たちと一緒に連れてこられるんです。その子どもたちを、まず私たちが受け取るわけです。親は男は男健（男子健康室）、女は女健というところにいった

んですよね。それで、親と引き離して私どもが子どもを引き取るんですよ。すると、風だらけ、疥癬だらけで、私生まれて初めて風ってのを見たんですけど、生地が見えないほど衣服にべつたり風がたかっている子なんかも来まして。そういう子なんかは、あまりの肉体的苦痛の為でしょうか、ぼうっとしていて口もきけないんですね（筆者の聞き取りによる。以下の証言も同じ）。

育児室の生活

昭和十二年頃の育児室の一 日を再現してみよう。

朝、子どもたちは六、七時ごろ目覚め洗面等を済ませ、八時に出勤してきた保姆が宿直者の協力を得て朝食の世話ををする。

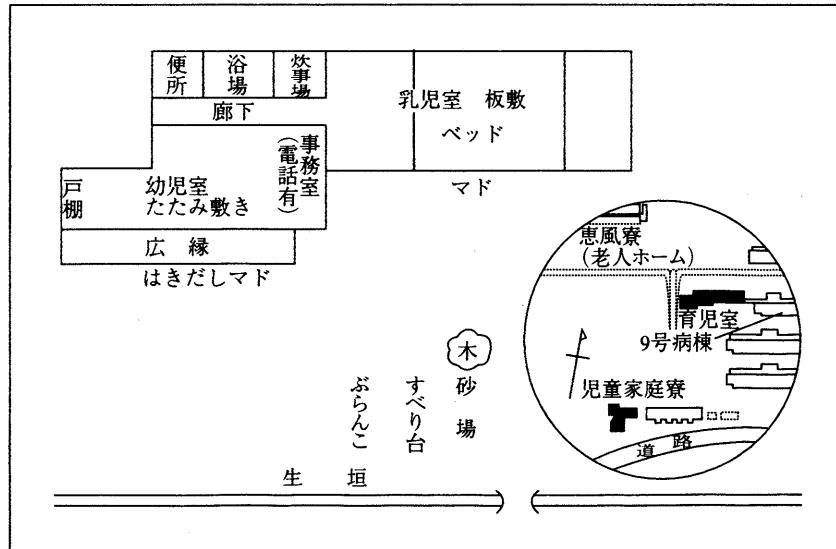
朝食後は集まつて、室内で遊戯をしたり、育児室前庭や、あるいは広い院内を散歩する。昼食の後昼寝、その後三時のお八つを食べてしばらくあそぶと四時には夕食となつた。夕食の時間は成人と同じである。夕食後、保

姆等が布団を敷く。すでに、所かまわず眠つてしまつて
いる子どももいて、この子たちを布団に移してやる。

保母の退勤は一応五時であったが、なかなかこの時間
には帰れなかつた。泣く子を後に保母たちが帰ると、後
は一、二名の宿直者でおむつの取り替えなどの夜の世話
が始まる。

看護婦のみで行われていた乳幼児の世話に、保母が加
わるようになつた昭和十二年、初めての保母として就職
した志々多江子氏は子どもたちや保育の様子を次のよう
に語つてくれた。

私が最初に入つた当時、乳児室のことは看護婦
さんがやつっていました。でもただ注射して、食べ
させて、牛乳飲ましてやるのじゃいけないから、
一時間でも抱っこしたらどうですかって言つたら
ら、それはお医者さんがさせなかつたですよ。大
変だからつていうんですね、だから寝かせっぱな
しですよね。それで、乳児室でも私たちがするよ
うになつたの。自分の子どもなら抱いたりおぶつ



▲図 養育院育児室建物略図

たりするでしょ、うばぐるまに乗せて外に出したり、そういうのも一つの保育ですね。

て、つかまらせたりして、それから降ろして立つ練習をさせて歩くようになりました。

養育院の庭を散歩したのですが、外に出ると

キャーキー涙くんですよ。外に出るということがありませんでしたから、怖かったんですね。手を握って歩いているときは、いいんですけどね。

このように、子どもたち全般に、経験不足による問題がみられ、保育者の工夫と努力がなされた。元保母、細田親子氏は運動発達の遅れをみせていた子どもに次のように懸命な働きかけを行ったという。

私が、戦前の養育院育児室で保母や看護婦として勤めた九人の方を訪ねたのは、かれこれ十年近く前のことになる。育児室の実際について教えていただいたのみならず、戦前戦後をくぐってきた様々な生き方にふれ、多くのことを学んだ。彼女らの思いの一端を紹介してみたい。

初代保母長の和泉屋雅子氏は、東京女高師保育実習科を卒業後、幼稚園に勤めていた。しかし、社会事業の仕事がしたいと母校の倉橋主事に願い、養育院を紹介され、就職したという。半年間勤めた後、結婚のため退職したが、当時の気持ちを次のように語つてくれた。

私は養育院自体のことを詳しく知らなかつたんですよ。まあ、養育院なんかは一番どん底の階級の人たちの子どもなんだからと、そちらに行つた

んです。でもその中たるや、ものすごいんですよ。それでも、長く続けたかったのですが、その気力が無くなつたんですよ。あんまり惨めですね。

乳児なんかが前の日にその辺から拾われてくるでしょ、そうするともう、あくる日には死ぬでしょ。そんなのばかり見えてるととても辛くて、養育院の方には大変悪いけれど、おしまいにしたんですよ。

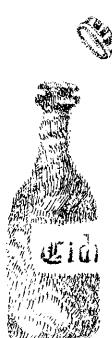
さきにも紹介した高橋寿美氏は二年程勤務の後、病を得て退職した。その後、幼稚園、保育所で長く保育者として勤めた。養育院の経験はすさまじいものであつたが、そこから得たものは大きかつたという。

私は後で子どもを扱うようになってからも、養育院のときの子どものことを考えたり、あの時学んだことが役に立つことはあると思います。例えば、子どもは一人一人違うんだ、ということを

知つたということですね。本当に差のある子ども

身、数々の修羅場をくぐつてきた人だけに、少々のこと

たちがいましたからね。幼稚園でもね、根気よくやつてやらなきやいけない子とか、伸ばしてやれる芽があるはずだ、というような子とか、色々な子がいるということが養育院で学んだことだと思いますね。保姆伝習所ではそういうことは習わなかつたような気がするんです。説話という時間があつて、律動というのがあって、それからピアノが大変だったことや、そういう記憶しかないんですね。養育院で、本能的に一人一人違うんだということがわかつたような気がしますね。



では動じない強さと子どもたちへの深い共感をもらし遭遇の改善に努力した。乳幼児が育児室で二十四時間集団生活をすることの問題性を指摘し、院内の職員住宅を使い「児童家庭寮」をつくったのもそのひとつである。

棄て子とかなんとかで家庭を失った子なんだから、家庭がなくちゃいけない。育児室は「保育園」で、家庭から保育園に通うという形をとらな

いと普通の子にはなれないと私は主張しました。

養育院の中にはお医者さんの家も職員の家もちゃんとあるんですよ。そのなかの、自宅から通勤できる課長さんの家を提供してもらってね。そうすると、そこに「お母さん」が必要になるわけだ。お母さんは保姆学校出でやない人のほうがかえつていいかもしれない。それで私といっしょに苦労した人を連れてきて保姆にしました。

*

戦後末期、育児室は塩原に疎開したが、厳しい食糧事

情のもと多くの命が失われた。戦後は病院内に移され、しばらく乳児院として存続の後、廃止された。戦災を免れた旧育児室の建物は、狩り込まれた浮浪者を収容する「幼少年保護寮」となり、かつて乳幼児が遊んだ部屋に、逃亡防止の竹格子がはめられ、周囲には竹矢来が巡らされることとなつた。

(淑徳短期大学)

参考資料

松本園子「東京養育院育児室における児童処遇」(昭和六三年度科研費研究成果報告書『社会福祉実践史の総合的分析』)

松本園子「養育院育児室収容児童の社会的背景」(『戦後日本社会事業調査資料集成』第五巻、一九九〇、勁草書房)

現象学から 保育の世界を見る(1)

園空間に住みつくことと 他者のまなざし

榎 沢 良 彦

はじめに

私たちは、新入園児を早く園に慣れさせようとします。この「園に慣れる」ということは、「園空間に住みつくこと」と言い換えられます。「園空間に住みつく」とは、自分の家にいるときと同じような在り方で園空間にいられるということです。本稿では、「園空間に住みつくこと」がどのようにして可能になっているのかを、具体的な出来事を通して考えようと思います。

一、入園当初の三歳児N夫の姿

三歳児のN夫は入園以来一週間ほど、幼稚園に行くことを嫌がっていました。N夫は園に来ても母親から離れようとはせず、担任のY先生も受けつけず、泣いて家に帰ります。五歳児クラスの兄の所に連れて行けば、N夫は母親から離れてすごせるのですが、自分のクラスには入ろうとしません。おやつの時間にY先生が誘いに行くと、なんとかクラスに戻るようになりました。

そして、Y先生を拒否しなくなつてきました。

場面一 部屋の片づけをするN夫

(一九九六年四月二十日)

きょう、N夫は初めて父親と登園して來た。やはり、緊張した表情ではあるが、帰りたがつて泣くことはなかった。担任のY先生はN夫と親しい関係にならうと、意識的にN夫と一緒に遊ぶようにした。N夫は初めて、自分のクラスの友だちに混じつて、砂遊びなどをしてくれた。

場面二 Y先生と楽しくすごすN夫

(一九九六年四月二十六日)

今朝は、N夫は母親から離れようとせず、母親はN夫とうさぎを見に行くことにした。Y先生が様子を見に行くと、N夫は遠まきにしてうさぎを見ている。Y先生が「うさぎいる?」ときくが、N夫は答えず、一匹のうさぎを目で追っている。しだいにN夫の表情がやわらいでくる。Y先生が顔を隠して、N夫に向かって“いないないばあ”をしてみせると、N夫は笑顔になり、二人でそれを三、四回する。

Y先生が保育室に戻るために、N夫に「Nちゃんも一

た物を分解しようとするが、ブロックがはずれない。そこで私が「先生が持つててあげるから引っ張つてごらん」と言つて勧めると、うまくブロックをはずすことができる。ブロックがはずれるのに合わせて、私が「ポン、ポン」と言うと、N夫は私を見て、嬉しそうに微笑む。

緒に行く?」ときくと、N夫はうなずく。二人手をつないで戻る途中、会話をする。N夫の方からチューリップを指さして「チューリップ」と言つたり、「さいてる」等と、Y先生に話しかける。

場面三 おやつの時間、私と打ちとけて遊ぶN夫

(一九九六年四月二十六日)

おやつの時間になり、子どもたちは椅子を並べて輪になつてすわる。多くの子どもたちはおしゃべりをして、元気に動いているが、N夫は無表情で椅子にする。私は意識的にN夫のすぐ後ろにすわる。Y先生と子どもたちは立ち上がり、アニメの主題歌を身振りをまじえて歌う。N夫はそれに乗つていけど、すわったままである。そこで、私は彼の側で、笑顔で手拍子をしてみせる。すると、N夫は私の方に振り向き、見ている。やがて、笑みがこぼれてくる。歌が終わるころには、N夫の表情はすっかり柔かくなる。

いよいよおやつ。N夫は菓子をもらうと、私に見せ

る。菓子を食べ終えた私は、Y先生に牛乳をもらつて飲んでいる。私が「Nちゃんも牛乳もらつておいで」と促すと、N夫は席を立つてもらつてくる。牛乳を飲み終えた子どもたちが数人私の所に来て、洗つたコップを見せたりして、私と遊ぶ。その子どもたちの中に、N夫もいる。そして、彼も他の子どもたちと同じように、空になつたコップを私に見せる。私が「Nちゃん飲んじやつたの。じゃ、洗つてこよう」と言うと、N夫は洗いに行く。N夫がうがいを始めたので、私が真似をしてみせると、嬉しそうに笑う。

二、園空間におけるN夫の在り方の変容

〔場面一〕で、N夫は緊張してはいましたが、泣くことはありませんでした。このことは、保育室が少なくとも、「逃げ出すべき空間」から「踏みとどまれる空間」になりつゝあることを意味します。それゆえ、N夫は兄の所に行かず、クラスの友だちの中に混じって遊ぶことができたのです。N夫が実際に保育室にとどまることが可能になったのは、Y先生が意識的にN夫についていたことです。したがって、N夫はY先生の能動的なかかわりを受け入れるようになっていると言えます。

ところが、片づけが始まつたとき、N夫は、他の子どもたちと同じように、Y先生と片づけようとはしませんでした。つまり、この日、N夫はY先生とかかわり合つたとは言え、Y先生が「まだ自分から近づいてはいけない存在」だったと言えます。しかし、N夫は離れた所で自ら積木を片づけ始めました。N夫は、みんなに加わって一緒に片づけをすることはできなければ、みんな

同じように片づけをしようという気にはなっていません。それは「N夫が友だちを肯定的な存在として意識するようになっている」ということを意味します。

緊張した面持ちで片づけを始めたN夫に私が話しかけると、N夫は私の指示に従つたり、私のおどけた声に思わず笑みを見せたりしました。私がN夫と接したのはこの日が初めてでした。N夫は見ず知らずと言つてもよい私からの働きかけを受け入れたのです。このことからわかるように、「N夫は保育者と一緒に遊べるようになってきている」と言えます。友だちへの態度も考慮すると、「N夫は他者を肯定的な存在として受容しつつある」と言えます。

〔場面二〕では、N夫はY先生の“遊びへの誘い”に對し、即座に笑顔で應えました。つまり、N夫は自らY先生にかかわるという姿勢をとつたのであり、そのことでY先生と「同等の遊び仲間」になつたのです。その後、N夫は何の抵抗もなく、自分からY先生に話しかけようになりました。このときには、N夫から緊張感は

消失し、Y先生と共にいること自体を楽しく感じるようになっています。N夫は、保育者からの働きかけを待つという「受動的な在り方」から一步踏み出し、自ら保育者に働きかけるという「能動的な在り方」になりつつあります。

こうして、N夫は他者の存在を肯定的に受容するようになつてきましたが、他の子どもたちに関しては、まだ直接かかわり合える存在とは感じていません。「場面三」では、保育室でN夫はみんなの中に混じつていました。しかし、他の子どもたちが楽し気であるのに対し、N夫は無表情でした。つまり、N夫はみんなの中にいながらも、孤立して存在していたのです。「場面二」では、N夫はY先生と親しくなることで園空間に住みつくことができていました。ところが、この「場面三」では、N夫は孤立しているゆえに園空間に住みつけていません。それは、Y先生がクラスの子どもたち全員を相手にしており、特別N夫にかかわってくれるわけではないからです。保育者が個人的にかかわってくれると

き、子どもは「よそよそしい空間」の中で、△投錨点▽を手にすることができますが、N夫にはこの△投錨点▽がないのです。

ところが、私がN夫の側に行き、笑顔を向けて手拍子を打つというように、個人的に働きかけると、N夫は私に興味を示し、笑顔を見せました。そして、N夫と私との間に直接的なやりとりが生じました。二人は互いに笑顔を向け合い、楽しさを感じ合っていますから、容易にふざけ合うこともできます。つまり、N夫と私は「遊び仲間の関係」になつてしているのです。

N夫が「無表情で緊張した在り方」から「やわらいだ遊び的な在り方」に変わったのは、私の個人的な働きかけがあつたからです。N夫は「共に遊ぶべき具象的個別的な他者」、つまり、園空間に住みつくための△投錨点▽を見い出したのです。

私の側で牛乳を飲んでいるN夫は、私と遊んでいる子どもたちの仲間に入つてはいませんが、もはや「孤立した存在」ではありません。彼には遊び相手としての私が

存在しています。その私が他の子どもたちとかかわり合っていても、彼が望むときにはいつでも私が彼に働きかけたり、応答することを、N夫は信じているのです。

他の子どもたちと私が「遊び仲間の関係」にあるのと同じ様に、N夫も私と「遊び仲間の関係」にありますから、N夫は他の子どもたちと同じ在り方をしていると言えます。それゆえ、N夫と他の子どもたちが直接かかわることがなくとも、N夫だけ“孤立している”という感じは受けません。明るい表情のN夫が、私と他の子どもたちのやりとりを見ていたり、彼らと同じような仕方で私にかかわってくることからわかるように、N夫は他の子どもたちの中に“溶けこんでいる”的な仕方で私のところに来ています。

三、園空間への住みつ

きと他者

N夫は徐々に園空間に住みつけるようになつきました。そ

れは単に園空間を見知ったからではありません。園空間への住みつきを可能にしたのは、他者の意味が変容したことです。

「場面三」で、保育室に子どもたちが集まっているとき、N夫は他の子どもたちから孤立している在り方をしていました。N夫は確かに他の子どもたちの中に存在していますが、彼らと「個別的な人格」として交流していません。N夫は他の子どもたちを意識していますが、彼らの方はN夫に個人的な関心を向けているわけではありません。つまり、N夫の周囲の他者は彼に対して、「無関心な一般的な他者」として存在しているのです。このようないくつかの「一般的な他者」として現れている他者たちの中に存在するとき、子どもはその空間に住みつくことができず、「根なし草」「浮き草」のように漂うことになります。

ところが、N夫はやがて、笑顔になり、生き生きし始めました。それは、私がN夫に直接働きかけたからです。このとき、私という他者は、N夫にとって「一般的な

な他者」ではなく、自分に特別な関心を向けている「個別的な人格としての他者」「個別的に固有な存在としての他者」です。逆に、私にとってもN夫は、私が特に彼に関心を向けている以上、他の子どもたわとは区別された「固有な存在」です。

このように、子どもと保育者の双方が、共に「個別的に固有な存在としての他者」に出会ったとき、子どもは△投錨点△を手に入れ、その空間に住みつくことができるのであります。同時に、それは、子ども自身が「固有な存在」として生き始めることもあります。

四、他者のまなざし

子どもが園空間に住みつくためには、個別的に固有な存在としての他者に出会うことが必要ですが、それは「他者とまなざしを向け合う」という仕方で起こります。例えば、「場面一」では、私はN夫に笑顔を向けて話しかけ、やがてN夫も私を見て微笑みました。「場面二」では、Y先生がN夫に“いいいないばあ”をして

みせることで、N夫がY先生に笑顔を見せました。「場面三」では、N夫の側で手拍子をしている私を、N夫が振り向いて見て、笑顔を見せました。どの場面でも、N夫と保育者がまなざしを向け合うことが起きています。

ところで、N夫の在り方の変化を注視してみると、「他者とまなざしを向け合うこと」は単純なことではないことがわかります。N夫は、入園時からしばらくの間、母親から離れず、Y先生が優しくかわろうとしても拒否していました。つまり、N夫は、Y先生という「個別的な存在のまなざし」を受け止められなかつたのです。Y先生が「固有性」を感じさせず「一般的な他者」として存在している分には、N夫は母親と共に何とか園空間にとどまつていることができたのです。

子どもにとって、園内の他者は、まずは「一般的匿名的な他者」「疎遠な存在」として現れます。その他者が「匿名性」を保持していれば、子どもは何とかその空間に混じつていることはできます。ところが、この他者が「匿名性」を脱ぎ捨て、「固有性」を際立たせて近づく

てくると、もはや子どもはそこに踏みとどまる」とが困難になってしまいます。つまり、他者がいまだ親しい存在でない場合、その他者から個別的なまなざしを向けられる、それと向き合うことができず、緊張し、萎縮してしまうのです。

N夫はしだいにY先生と親しくかかわるようになつてきました。すると、N夫は他者（Y先生や私）から個別的なまなざしを向けられることに喜びを感じるようになつてきました。「場面三」で、私が側に行つてかかわったことで、N夫が喜んだことからわかるように、「他者にまなざしを向けられること」がN夫の「孤立感」を消滅させ、「他者への親密感」を生じさせています。

こうして、他者が「親しい存在」になるに伴い、他者のまなざしは子どもに緊張と不安を与えるのではなく、存在を支えてくれるものとして、子どもに安心感を与えようになります。疎遠な他者が「匿名性」の内に「一般的な他者」として現れる場合、子どもはそのまなざし

と向き合わないですみますから、「園空間に混じる」という仕方でとどまることがあります。他方、他者が「親しき」と共に「固有な存在」として現れる場合、子どもはそのまなざしと向き合うことができ、「園空間に住みつぶ」ことができるのです。

ところで、「他者が親しい存在になること」と「他者のまなざしと向き合うこと」は因果関係にはありません。両者は表裏一体をなしているのであり、相互規定的な関係にあります。この「相互規定性」こそが、実存する子どもと保育者のかかわりの特質なのです。

（富山大学）



身辺雑感

—私がかかえている葛藤から—

津守 真

先日、ドイツOMEPEPから、幼稚園の現場の先生たちと行政の方々が、日独の青少年国際交流プログラムの一環で三週間来日された。私は、派遣側と受け入れ側の両方の間に立つてお世話をしたのであるが、いくつも誤解を生じた。そのひとつは、青少年という概念がドイツと日本とでは異なることが原因であることが分かった。ドイツでは、青少年（ユーティン）事業は、法的に乳児から二十八歳までを含み、最近は老



年までも含む傾向であるのに対し、日本の概念では、青少年事業は、十六歳から二十六歳位までの年齢に対する事業であり、それに該当しないものは除外される。また、周知のように、ドイツでは幼稚園（キンダーガルテン）は保育園をも含むのにに対して、日本では幼稚園は文部省、保育園は厚生省の管轄である。予算面もこれに対応して厳密な区分があるから、ドイツから見ると日本のシステムは柔軟性に欠ける。私は三週間いろいろの機会に両者の会合に出席して葛藤を経験した。今回ドイツ側代表で来られたゲラー女史は、昨年はOMEП世界大会で横浜に来られ、これまで世界各地でのOMEП世界理事会で何度もお会いして親しくしてきた方である。今回は同じ葛藤を日独両側からつぶさに味わって、これからどうしたらよいか、帰国される前夜十一時までも話し合った。今回は青少年事業によって派遣された優秀なドイツ語通訳がいつも同席されたので、お互に外国語で話すことによる誤解はなくて済んだのは有り難いことだった。

私自身、これまで十三年間にわたる保育の実践の場から離れて、いま、障害をもつ大人の施設（社会福祉法人野菊寮、御殿場コロニー）のお世話にエネルギーを使って



いる。ここでもまた、新たな社会的ニードと制度との間の葛藤にぶつかっている。法的には、精神薄弱者更生施設であるが、これは五十年前に定められた名称である。現在では、精神薄弱、白痴、痴愚、魯鈍などの呼び名はほとんど差別用語であり、日常的には用いられない。親も専門家もこのような語は好まない。その居住型施設で三十年以上も過ごした人々は、自分の選択でここに来たのではなく、もっと普通の社会環境で生活したいと願っている。しかしそれを叶えることは現行の制度では困難が多い。本誌の十二月号と一月号に私は米国におけるこの分野の一八〇度の変革について記した。日本と米国とでは社会風土が異なるから、同一には論じられないが、だからと言つて現状で良いとは言えない。人間の生涯の幸せを原点に考え、社会環境を変えてゆく努力をするのが福祉と教育なのではないか。

ドイツの方々が御殿場の施設に来られたとき、話は障害をもつ人々に及んだ。ドイツでは、第二次世界大戦当時、障害者にとって暗黒時代があつたという。障害者は生きている価値がないと考えられ、消しても当然との考え方があつたという。ひとりの方がこの過去に言及された重い沈黙のひととき、私はこの国と私共の国とには戦争の共通の記憶があることを思った。



ドイツには精神障害者の町ベテルがあることは広く知られている。障害をもつていても神の前の人間として等しいという宗教的精神から、どの家も障害者を家族の一員として受け入れた輝かしい伝統をもつ。それが長い年月を経る間に、現代は町全体が他のコミュニティから孤立する危険も生じて来たという。一九六〇年にドイツに障害者福祉法ができて以来、人権が尊重され、コミュニティで生活するのが普通になつている。この点は、他の欧米諸国と同様である。ところが最近は別種の問題が生じている。胎内から障害の有無が分かるようになり、それに伴う弊害が心配されている。科学の進歩は良いことばかりではないと、ドイツの方々がこもごも語られた。世界中に同様の深刻な問題が起りつつあるが、同時に、障害をもつっていても「人間」としては対等であるという新しい福祉の考えが世界中に進行しているのも事実である。これは、二十世紀末の希望ではないか。

私自身、若いとき、偶然の機会に障害をもつ子どもと出会い、生涯の最終段階までおつきあいが続くことになった。多くのことが私から離れて行つても、このことだけは離れきれないというのは、それだけこの問題が人間社会の本質にかかわるからで



はないだろうか。私も若いころは、この子たちを弱者と見て、守らなければと情熱をもって考えたこともあった。私が生きた時代、高度成長期、社会はこの人たちを一般社会の目にふれないように隔離する政策をとった。他方には、既存の社会を規準にして、それに適応するよう訓練教育することに重点がおかれた。当然ながら、それに追いつかない重度の人は底辺に取り残される。いま、世界中に、これではおかしいという考えが多く人の胸に沸き起こっている。それには、外国人でも他人種でも差別せずに一緒に教育するインターナルチュラリズム、すなわち、異質な文化を尊重して新たな文化をつくるなければ社会の進歩はないという欧州共同体の考えも寄与している。障害もその異質性のひとつである。時の経過の中で、私自身も教育され、障害の見方が変化して来た。そして最近は私自身の施設で、施設からホームに環境を変えると、行動の仕方が変わることを眼前に見ている。物的環境のみでなく、人間関係の心理的環境が変われば、障害をもつ人々はもっと生きやすくなるだろう。そして社会全体がもつと人間的なものへと変わるのではないか。それは理想主義だと言われる。しかし、現に、日本以外の国では、障害にではなく、人間に重点をおくピープルファースト運動によって福祉は大きく変化している。その考え方は幼児教育を専門と



する人には容易に受け入れられるだろう。

私は月に一度、愛育養護学校の教養講座で親たちに話をしている。その度に、子どもたちが寄つて来てくれるのがうれしい。子どもの中に身をおくだけで私共はなんと幸せなことか。この子どもたちが大きくなつたときに、社会が今よりももつとこの人たちの価値を認めるようになつて欲しいと切に願う。幼児教育の専門誌に、障害をもつ大人のことを毎回記すのは場違いではないかと私は何度も考えた。しかし、子どもはじきに大人になる。障害をもつ子どもの親たちは、その子たちの成長後を現状の福祉環境のままで考へるから育てる希望を失い、そのことが子どもの悩みをも大きくしている。幼児教育は大人の福祉にまで連続している。そう考へて私は自分で納得している。

次回からは、再び、「子どもの世界」を主テーマに連載したいと思っている。

❀❀❀ ある日の育児日記から ❀❀❀

(76)

佐藤 和代



わが家の朝ごはんは、ごはんにみそ汁、納豆か海苔と野菜、が定番。でも最近、有がこれに異議を申し立てています。朝起きて「ごはんとみそ汁」を見ると、「これ、朝ごはんじゃないよ」。「何言つてんの、朝のごはんだから、朝ごはんでしょ」「違うもん、朝ごはんて、パンだもん」「じゃ、これは何よ」「タごはんだもん」…? それでは、と有だけパンにしてやると「パンは朝ごはんだけど、おかずが違う」とまたごねます。しかたなく何日か、「トーストとベーコンエッグ」にしましたが、特によく食べるわけでもない

い。で、またごはんを出したら、この日は食卓を見るなり他の部屋へいつてしまつた。私もちょっと頭にきて「有は食べなくていい!」と宣言。保育園のお便り帳に、朝ごはん抜きの理由を書いて、そのまま登園させました。さて園からの帰り、お便り帳を開くと、「今日はみんなの前でわざとらしく、『先生の今日の朝ごはんはね、ご飯とみそ汁!』朝はやっぱり、ごはんに限るよね」と言いました。すると有くん



「有も大好きだよ」うーん、言つてましたよ」と調子のいいやつだ。
それでもまた、次の日は「ごはんは朝ごはんじゃない」と言う有です。この思
い込みは何なの?



震災後の子どもたち(15)

あのときの……

田辺 克之



じ、雨があれば傘をさしてトイレに入るような不自由な生活が半年ちかく続きました。

震災からもうすぐ二年がやってきます。フリー スクールの教室も自宅も全壊、神戸市内から通う生徒が多かったから、生徒の家も全壊ないし半壊の被害を被り、しばらくは連絡のとれない日が続きました。教室や自宅の移転先が決まらないまま私たち家族は柱の傾いた家にしばらく住み続けました。余震のたびに柱や壁がずれていく恐怖を感じました。

震災によって学校が避難所になり、教師と生徒や地域の人々が協力しあって、水を運んだり、焚き出しをしたり、配給を手伝う姿が連日テレビで報道されるようになり、一ヶ月もしないうちに、「学校に笑顔がもどった」などと安否確認のた



めに登校した生徒と教師が抱き合うシーンが報じられるようになりました。管理教育、偏差値教育の中で見失いがちだった「いのちの大切さ」をこの震災で学ぶことができたと語る教師の映像などを見ながら、僕はこれで学校もずいぶん行きやすくなるやろな、とぼんやりと考え、不登校も減るかもしれない、いじめもなくなるかも、と考えて、くうちに、フリースクールやめても大丈夫やろ、という気持ちになつていきました。

しかし、避難所に移つて連絡の途絶えていた生徒の親から「避難所にいると、逃げ場がなくて、不登校の娘がノイローゼのようになつて入院しました」という連絡が入りました。電話が開通し、鉄道が回復してくると、子どもたちがフリースクールに集まりはじめました。僕の予想に反して、学校にもどった生徒はいませんでした。急ぎよフリースクールの再開準備を開始。全国のフリースクールやネットワークの人々から応援の手

紙とカンパが送られてきました。チャリティーコンサートを開催してくれるグループや街頭カンパを申し出てくれるグループなどもあり、たくさんの人々から「阪神にかぞえるほどしかないフリースクールを絶対つぶしたらあかん」というメッセージが届きました。不動産屋を何軒もまわって教室になりそうな場所をさがしました。くる日もくる日も家探しをしました。やっとビルの一室を借りることができ、地域の方々のご好意で間借りしていた部屋からビルに移り、活動を再開することができました。これまで本当に胸が熱くなるような体験をいっぱい頂いて、どうにか二年間フリースクールの活動を続けてくることができました。

震災直後は、「いのちの大切さ」が確認され、これまで歪んだ教育体制が大きくゆさぶられたよに感じられたのですが、それはほんの束の間の出来事でした。「いじめ」で自殺する子どもがあ

とを立たず、あいかわらず教師の暴力が続き、「いじめ、自殺、不登校一一〇番」の相談電話は鳴りつけました。震災によって、兵庫県は大きなダメージを受けましたが、二年間で表面的にはずいぶん復興してきています。傷んだ校舎も修復され、学校もほぼ建物は元通りになり、そして管理制度教育も復元されたのです。「学校なんてかんたんに変わらぬわけないやん」と子どもたちの方が冷静でした。

今年一月八日、須磨の踏切で高校生の石坂さゆりさんが、快速電車に飛び込んで自殺しました。「私が死んだら、もういじめないで」という遺書を残して亡くなりました。また先月神戸市内でも姫路でも小学生が自殺しています。学校も息苦しはいつこうに変わっていないのです。これで学校も変わるかもしれません、とのんびり考えた自分の浅はかさが恥ずかしくなりません。震災という未曾有の被害を出した体験から、これといった教

訓も学びえず、社会を逆戻りさせてしまった大人の責任を強く感じます。フリースクールの灯が消えそうになった今年の春、僕は兵庫県庁に行き、公費助成の申し入れをしましたが、認められず、ふと帰り道、県庁玄関前の階段の上で、「もう灯油でもかぶって線香になるしかないか」と真剣に悩みました。しかしその時も全国各地から再建募金が寄せられ、窮地を脱することができました。「明石フリースクール冬夏舎の灯が消える」と聞きつけた卒業生たちが集まり、再建のための会議が開かれました。「フリースクールがなくなったら、俺らどこへ行けばいいんや?」と訴える卒業生たちの目は真剣でした。

九六年四月からは、高校中退生及び不登校生の学習をサポートするために「明石高等学院」を開設し、通信高校に通う人たち、定時制に通う人、また大検をめざす人たちのために、マンツーマン指導できる体制をスタートさせました。みんな好



きな時間に出席して、好きな学科を学習しています。たんに教科の学習だけではなく、いろんな行事やイベントを生徒とスタッフが共同で計画し、広島へ自転車で五日間かけて走る「ピースラン」や日本海まで一週間かけて歩く「子午線Walk」など大きな冒険にも挑戦しています。

学校へ行けないことが、まるでズルいことをしているように考えて、自分を責め、昼間は一歩も外へ出られない「どじこもり」の青少年が増えています。学校という集団になじめなくとも、学校に適応できなくても、十分個性的に生きていいくことができるし、自分で仕事を見つけ社会に適応しているたくさんの中輩がいることに気づいてほしいと思います。「みんなといっしょ」でなくてもいいはずです。そんなことで罪悪感をもつたり自分がいじめたりしないで、だいじなだいじな一度しかない青春なんだから、せっかく学校からとります。そしてゆっくり自分にあった生き方を見つけ



▲「ピースラン風96」



►広島県三原市小佐木島にあった「風の子学園」(フリースクール)の跡地で追悼集会を毎年行っている。コンテナがあった場所で代表が追悼文を読む。

(明石フリースクール冬夏舎・明石高等学院)

ていらっしゃいます。それはけつして大人から押しつけられたものではなく、悩んだ末、自分で切り開いた道です。学歴や偏差値のレールからはすこしはずれているけれど、だれも通らない道だから、つらくてもやりがいがある、と答えてくれた卒業生がいます。

震災から二年、フリースクールの活動もやっと以前の状態にもどってきました。学校以外のもう一つの「学びの場」としてのフリースクールが、各地に誕生すればいいのにと願っています。そして子どもたちの選択肢をふやす、それが子どもの個性、多様性を認めることになるだろうし、そのためにも社会はもっと努力しなければならないだらうと思います。

あそびはらひばものがたり

すとうあそえ

「あそびはらひば」は駒場幼稚園の課外活動の一つとして一九九六年四月からスタートしました。毎週木曜日二時～四時、現在のメンバーは年中、年長の子どもたち二十三人と大人スタッフ三人。「エデュテイメント (education+entertainment)」をテーマに、子どもたちにお面白く、私たち大人にも楽しい活動=遊びを毎回、元気に提案しています。今回は、九六年春のあそびはらひばの様子をピックアップしてレポートしました。

*

目黒区にある駒場幼稚園。土の園庭に大きなけや
かがじおんと一本。優しく風に吹かれながら、子ど
でこぐわのよみ。

では、あそびはらっぱものがたりのはじまり、はじまり。

羊のサリーちゃん登場

—プレあそびはらっぱ

四月。園庭に一台のトラックが到着。メヘヘヘ、
の声。来た来た、羊さんが来た。亀、うさぎ、モル
モット、ヒヨコ、ヤギも一緒にやつて來た。今日は
幼稚園の子どもたちみんなと、羊の毛刈りを見よう
という日。登園してくる子どもたちは、荷台から聞
こえる鳴き声と動物たちが醸し出す臭いで、すでに
興奮状態に突入している。

まずは、福田牧場のおじさんから動物たちのお話を
聞いてから、順番に柵の中に入つて、動物たちを
抱っこ。小さな手のひらにすっぽりはまっているふ
わふわのひよこ、身体をコチコチにして少しも動か
ずにおさぎをひざの上にのせて、顔だけ笑っている



▲みんなで記念撮影 バチ！ 右端にサリーちゃん
最後列の男性が福井氏、その右が筆者、左が千春さん

子、それぞれに可愛い。

羊さんの名前はサリー。毛でモクモクしているサリーチゃんと、やぎを交互に見ていた男の子が自信たっぷりに言った。「ひつじさんとやぎさんのおしりの大きさってちがうんだよ。ひつじさんのほうがでかいよ」と。「ほう、なるほど。見る所がちがうね」と私も、交互に見て確認。

サリーチゃんに触つてみた。羊脂のせいでシットツとしている。ゴミやフンのデコレーション付きで、なかなかの臭い。あそびはらっぱでは、夏にサリーチゃんの毛を洗つて、すいて、フェルトにする予定だが、果たしてきれいに出来るのかしらとちょっと不安になる。

いよいよ、毛刈りの始まり。

サリーチャンは、福田さんに連れられて大きなビニールシートの中央に登場。回りの子どもたち、お母さん、先生方がぐるりと囲む。サリーチャンは、



▲毛刈り直後、先を争って触る子どもたち

平常心を失つて、バタバタ暴れ出す。福田さんは、慣れたもので、サリーちゃんをパタンと組み伏せて、バリカンで毛を刈り出した。観客の「まあ、血

が……」「かわい

そうに……」とい

う同情の声の中、

おしつこ、うんこ

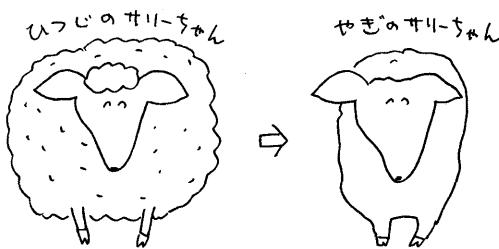
もしつかりしたサ

リーちゃん。毛刈

りは三分で終了。

「こわい」と

言つて私の手を握つていた女の子を始め、一様に子どもたちの目は見開かれ、まさにびっくり状態だつ



たが、刈つたばかりの毛をみんなで触る段になると、先を争つて触ろうとする。今までの緊張がふわっととけたように。

福田さんから、毛刈りは羊さんにとつて気持ちいいこと、また、新しい毛が生えてくることを教えてもらつて、みんなひと安心。さよならの前に、やけにさっぱりしたサリーちゃんと記念撮影、パチッ。

余談ですが今回、私は一つ発見したことがあります。「羊は、丸裸になつたら、やぎになる！」のです。

空とぶ新聞紙

初めてのあそびはらっぱ。子どもたちは「なにやるんだろう」という感じで地下のアトリエに集まってきた。まずは、アトリエに敷いたゴザの上にまるく座つて「はじめまして」のご挨拶。

「空とぶ新聞紙！」とスタッフの一人、"森の中" 大好き人間の千春さんのファンファーレを合図に子

どもたちは新聞紙を飛ばす。千春さんは、絵の具遊びをするために、床に新聞紙を敷き詰めたかっただけなのに、この一言で子どもたちのイメージが明確になったようだ。ひとしきり飛ばし終えると、今度はやぶつて、やぶつて、ビリビリビリビリ。丸めて丸めて、クチャクチャクチャクチャ。床に落ちた新聞紙の上に這いつくばつてニヨロニヨロニヨロ。すごいなあ、子どもたちのエネルギー。

千春さん、千恵さんと私の三人は顔を見合わせてしばし啞然。でも、なぜか、三人とも目が笑つている。「それ！」私たちもひとしきり新聞紙と戯れたあと、やつと、大きな紙と青、赤、黄色の絵の具が登場。子どもたちは、なんて切り替えが速いのでしょうか。新聞紙のことは、どこへやら。指、手の平

全部に絵の具をべつたりつけて、紙になすりつけている、いえ、こすりつけている、いえ、模様を描いている……? とにかくニッチャニッチャ混ぜながら

ら、絵の具の感触、そして「青と黄色で……ミドリ！」と色の変化を楽しんでいる。「赤くださあい!」「はーい」「黄色ちょうどいい!」「はーい」。絵の具はあつという間に売り切れ。子どもたちの足や顔、手がカラフルになつて、なんともいい感じに出来上がっている。

そろそろお片付け。千春さんの「ぞうきんマンだよう」の一聲がまたまた、子どもたちのイメージを明確にしたようで、新聞紙を丸めてぞうきん代わりにごじごじ床を拭き始めた。

かくして、あそびはらっぱは“新聞紙と絵の具まみれ”の中で始まった。

雨・雨・雨のあそびはらっぱ

雨女はだれ?と言いたくなるほど、五月は雨。「きょうは晴れてよかつたね」と喜んでいると、ちょうど二時に雨が降り始めるという具合。

晴れたら種蒔きのつもりが、ホールで段ボールを使つて迷路遊びをしようということになつた。迷路遊びをイメージしやすいようにと、千春さんが段ボールでトンネルを作り始める。すると、男の子たちが、やる気満々でやつてきて、段ボールの中に入る人、外でまわす人に別れてぐるぐる段ボールを回し始める。コーヒーカップみたい。乗つている人々は、お花が一斉に開いたようにチカチカ笑つてゐる。ただ、ぐるぐる回るだけ。ぐるぐるぐる。それが楽しい。

私は、ホールの段差にペちゃんとこにしたボール箱を斜めにセットしてみた。そのとたん、すういと一人滑り始めた。私もトライ。しかし、体重のせいか、いえ、せいで、厚い段ボール紙がふにやりとなつてしまつた。氣をとりなおしてもつと厚くする。子どもたちは、すべり台を目ざとく見つけて次々と滑り下りる。スイツ、スイツ、スウェイツ。何

度も繰り返す。今日は迷路遊びのつもりだつたけれど、予定は未定。好きなように段ボールと戯れる、これが一番と、三人の大人たちは納得。遊びはどんどん発展した。

段ボールでお店のカウンターが出来る。ホールの中央につり堀が出現。魚を釣つてくる人、それをお店で売る人、買う人。私は造幣局。ひたすらお金を作る。どんどん作る。もう、インフレ状態に突入。可愛い家も建つて、隣には「犬ボチ」の家もこしらえてある。中には、犬ボチになりきつた男の子がお座りをしている。「お手」といふとちゃんと「お手」をする。散歩にも連れていつてもらつている。ホールという一つの場所のあちらこちらで子どもたちも大人も大きい固まり、小さな固まり、あるいは一人でそれぞれに遊んでいる。いつの頃だつたか草と木と虫と鳥と風と子どもしかいなかつた、はらつぱの光景とどこか似てゐるような、そんな気が

した。みんな、同じ空気を共有している。

遊びは強制されるものではなく、面白ければ遊びたくなるし、遊び続けなくなる。そのことを実感して段ボールの巻は、楽しく幕。

風と布と色と子どもたちと

あそびはらっぱ初めての快晴！

園庭に、青い大きなビニールシートを敷く。そこにホースで水を流す。子どもたちは、水が大好き。キャーキャーウアワア。

服を脱ぎ始める子、裸足になる子、「あたし、はだしになれない」と言う子、ここでも、いろいろ。「はだしにならなくともいいよ」と答えると、ほつとした様子。

さて、今日のあそびはらっぱは、水遊びではなく、絵の具で模様を描く予定。ビニールシートを丸ごとパレットにしようと私た

ちは考えたけど、水遊びにすっかりはまってしまい、そんな勢いを見て、急遽いくつかのバケツに絵の具をとくことにした。

並行して、園庭の小さな木の間にシーツを二枚つ

なぎ始める

と、子どもたちは、その布

と布のつなぎ

目の隙間から出たり入った

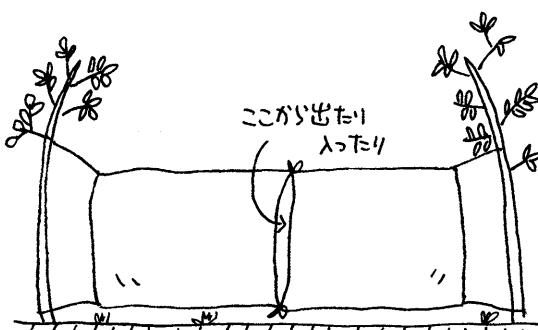
りし始める。

手の平でぱたぱた

て、風で膨

らんでいる布

と遊んでい



まず、私たちが、バケツの中の絵の具にハケを浸して、ふによふによふにと端から端まで線を描く。かすれている所なんか、いい感じ。

「えつ、やつていいの？」と聞く子。すぐやり始める子。少し離れて見ている子。

そして、一人一人好きなように布に色を付け始めた。プリンカップに絵の具を入れて、そのままジャーッと流したり、ローラーで同じ所を何度もゴシゴシこすったり、手の平をバケツに入れて絵の具を付けてそのまま、布にペタペタしたり。

なんて、すてきな色のカーテン……とみとれてい

たら、「キャー」という声とともに、突然ドサッと地面に落下！ 急いで元どおりに張ると、布は土まみれ。

ところが、子どもたちは、汚れた所に、さらに絵の具をバシャバシャ流して土をきれいに落としてしまった。少しも慌てることなく。

風と布と色と子どもたちの共同作品。うまく描うなんて思わない。心の弾むままに出来上がったステキな模様。

布は、乾かすために、しばらく園庭にそのままにしておいた。風にゆうらり揺れて、おかあさんと帰っていく子どもたちにさようならをしているみたいだ。

因に、この布は、日除け、幕、家の屋根と、あそびはらっぱで酷使されている。

*

季節は流れ、けやきの葉の色、咲く花、出会う虫たちの顔ぶれも変わっていく。そして、あそびはらっぱも、しなやかに、変幻自在に続いてゆく。春から夏へ……。

(幼年童話作家)

保育現場と学問の交流の中で

一九七八年・お茶の水女子大学児童学科
現職研究会の学びの中から 〈その二〉 —

長山 篤子

先月号では、M幼稚園の保育実践研究を通して、
それぞれの幼稚園のもつ文化が、子どもに及ぼす
影響について記しました。M幼稚園の見学レポー
トを持ち寄つてのゼミは、M幼稚園の先生方の保
育環境の見直しになつた事は言うまでもありません。
ご自分の園の特色を意識化する事により更に

次の課題に取り組まれたようでした。他の保育者
も研究者も、それぞれに、保育を省察する課題が
与えられました。その意味でまさに「保育現場と
学問の交流」の一端を担つていたと思います。

さて、今月は、A幼稚園の公開保育と実践研究
で取り扱われた事柄について記してみたいと思い



ます。A幼稚園のレポートは、一九七九年の「幼児の教育」一月号に「現職研究レポート」として、当時の宇部短期大学太田留美氏によつてまとめられています。私は、この研究会に所属した者として私が参観した視点から、A幼稚園の保育について学んだ事を記してみたいと思います。

A幼稚園参観レポート……一月十三日

A幼稚園は、千葉房総半島の入口にあり、二月という最も寒い時期の参観となつたが、春を思わせる雰囲気が園を包んでいた。門を入ると、中央に大きな松がありその下に白いテーブルとイスが置かれていた。テーブルの上には小さなカップにストックの花びらが入れてあつた。保育室には、沢山のストックときんせん花が飾られている。土は黒く、広々とした園庭は、自然の息吹が充分に感じられた。前回参観のM幼稚園が人間の作り出

した文化に支えられているのに比し、A幼稚園は自然に支えられた保育が実践されている様子が窺えた。

そんな雰囲気の中で、注目されたのは、子どもたちの動きであつた。自由感に溢れ、のびのびと活動している子どもたちに心地良さを感じると共に、K男、U男の動きに参観者は、注目した。K男、U男と保育者との関わり方に不安を覚えたのである。一方、私は、四歳の七名の男児の遊びに関わる保育者の動きにも不安を覚えた。この二点について次のようなレポートが記された。

四歳七名の男児の遊びを巡って

ママごとコーナーの赤いテーブルに七名の男児が座つてゐる。手に小さな積木やわりばしをつけた棒を持つてゐる。

Y君「みんな言うことをきかなければだめだ

ぞ——」

他の男児は騒いでいる。

Y君「お——い、みんな武器をかせ、武器を持つてこい」

Y君は他の六名に指示をし、武器と呼んでいる棒を集め一か所に置く。Y君は続いて良い武器と悪い武器に分け、自分の物と取り替えたりする。

その繰り返しで「きやー、わあ——」とふざけ

合う。保育者が「トントン失礼します」と入って

くるが、Y君は、「武器があるから座らないで下さい」と言う。保育者と男児たちの気持がちぐはぐで保育者は棚に置いてあるダルマを指して「ダルマさんをこわさないでね。安心して外に行くわね」とこのグループから離れてしまう。その後女児が「ドロボーコつこしているのでしょうか」と入ってくる。Y君は「正義の味方こつこやつているんだ」と言う。他の男児は女児を追いかけたり

する。Y君は「おいやめろ。先生におこられるぞ——やめ——」と指示を出す。「こんどいじめるとすぐ仲間に入れてやらないぞ。おれがやつつけろと言つたらやつづけるのだぞ——」などと言う。ふざけ合つ

ているうちに片づけになる。

Y君の指示で、遊びが発展するということもなく、ただ一緒にいることを喜んでいる様子で、このグループの遊びは終了してしまった。途中、保育者が入つて来るが、子どもたちとの会話がちぐはぐでかみ合わなく、子どもたちの気持も擗めないままうまく言葉もかけられなく、保育者は外に出て行き、最後まで、このグループと関わること出来なかつた。



K君を巡って

年長男児K君ははげしくあちこちを走り回つて
いる。何かに集中して遊ぶことがない。友達との
接触もみつかない。

テラスに行き、水道の水を勢いよく出す。蛇口
を外に向けて水を放出する。その水の流れを見
て、特別に喜んでいる様子もない。まわりに子ど
もたちが駆け寄る。「K君が水を流している!!」
と女児が叫ぶ。M先生が走つてくる。しばらく様
子を見ている。一緒に何かしようとするがK君は
応じない。M先生が「寒いから、水は大事だか
ら」と水道を一旦止めると、K君は再び蛇口をひ
ねる。M先生も戸惑いながらその様子を見てい
る。他の子どもたちも「あ——あ」と言いながら
見る。

テラスやまわりがすっかり濡れる。K君は、濡
れた場を歩きまわり、そのまま走つて他の場所に

移動する。M先生は、テラスをぞうきんでふき、
まわりを片づける。年長女児も一緒に手伝う。

*

以上の場面を巡つて二月二十日にゼミが持たれ
ました。私のレポートにはK君を巡つての記録し
かありませんが、四歳児クラスのU君の存在につ
いても他の観察者の注目が集まりました。U君
は、K君とは対照的に、保育者との会話も殆どな
く、遊びに誘わると逃げてしまい、遠くから遊
びを見ていたとの事でした。

ゼミではまず二人の男児について担任の先生方
により、これまでの園生活の状況や、先生方がど
のように接していらしたか、説明がありました。

U君については、担任の先生は、いつも何かし
てあげたいが、どのように関わって良いかわから
ないとの発言がありました。

K君については、入園の出会いの時から多動な行為に驚かされたとの報告を受けました。又高い所を好んで登つてしまふので危険であり、困った様子も報告されました。しかし、年長組になって、友達と遊んだり、保育者との関わりも多くなり良い状態になってきたと安心していたが、最近、逆戻りをしたような行動が多く水を放出するといった遊びが出てきて困惑しているとの報告がありました。

A幼稚園の先生方は「一人一人の子どもの違いを認めよう」と話し合っているが、多くの子どもと共に過ごす中で、それがなかなか実現出来ないと葛藤する様子も窺われました。

津守先生は、これまでのご自

U君とK君を巡つて多くの事がゼミでは話し合われました。どの幼稚園でも、このように、保育者が子どもの状況にうまく応じられなく、よい対応が出来ない事例を持っており、A幼稚園の先生

方の苦労に共感を覚えました。
討論の中心になつた事柄は、保育者と子どもが、うまく出会っていないと言うことでした。

四歳七名の男児の遊びを巡つては、ゼミでは、討論の中には組み入れられませんでした。その

*



後、A幼稚園の先生方のレポートが提出され、そ

の中に、この日の状況に対するコメントがありました。この日のY君を中心に集っているグループの遊びはウルトラマンごっここの続きをしていることがわかりました。先生は、子どもたちの遊びのイメージを壊すことを懸念されていました。保育者が必要としないような遊びにどう対処して良いかわからないと記述してありました。先生の不安な一面が窺われました。

このゼミでは、K君、U君、Y君を通して、保

育者と子どもの出会いをどのように考えたらよいか、多くの学びをしました。子どもに毎日接している保育者は、その時々の状況の中で、いろいろ判断しなければならない事柄に迫られ、それが、子どもとの対応に繋がっていく様相をあらためて知らされました。研究者は、一人一人の子どもや、保育者を、どのように捉えたらいか、側面

から省祭して下さいました。

「大人と子どもの間に横たわる問題」としては結論をここで出すのではなく、一人一人の子どもに「心をください」接していく事の重要性が認識されたように思います。一方、保育者はもう少し、自信をもつて子どもと共に生活する必要があり、その為には、それぞれの園の保育者がどのような信念を持って生きていくか、問い合わせなければならぬことも学ばされました。

(青山学院幼稚園)

お母さんのまなざしと ケンの目

吉川はる奈

プロローグ

ケンに出逢って、私は「子どもの育ち」とは本

当に何て深く大きな意味をもつのだろうと感じずにはいられなかつた。ケンは「言葉が出ない」と

いう大きな壁をもちながら多くの人との関係を着

実に広げていった。それはケンが価値ある人間として認められた環境があまりにも自然に作られてきた過程ともいえるかも知れない。

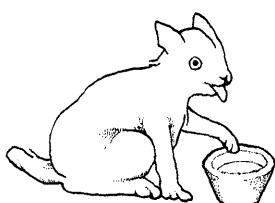
出逢い

妊娠後期の大きなお腹をしたお母さんがケンを

保健所の心理相談に連れてきた。連れてきたとい
うより慌てて追いかけってきたという方が適切かも
しない。ケンは初めての部屋で落ち着かない部屋
中をぐるぐる駆け回る。初めての場所はどんな子
どもであっても不安で落ち着かないのは当然のこと
なのだがケンは奇声を発し、あちこち走り回
り、目も合わない。ケンは二歳半を過ぎていた。
「お母さんからの発達相談の訴えで来所した」と
始めに保健婦さんはケンと毎日どうやって過
ごしているのだろうと心が痛んだ。「毎日
大変でしょう」というとお母さんは首を大きく縦
に振りうなづいた。心なしかお母さんの目がうる
んでいるように見えた。だがすぐにお母さんのま
なざしは本当にまっすぐと私に向けられた。次に
発せられることばは何だろと私は待った。

お母さんは「出産で実家の奈良へ戻る日が近づ

いている、ケンの動きが心配だから知り合いに頼
んで検査してもらおうかと思つていて」という。
相談の場で、初めて出会つて心配だから病院を紹
介するなんてことはまずない。だがお母さんのま
なざしはまっすぐ私に向けられ迷いは見られな
かった。というより迷いが見られないのではないか
く、突破口を捜していたのかもしれない。これま
でのケンの家の様子、家族のこと、お母さんの
思い、お父さんの
考え、友人に相談
したことなど様々
なお話をお母さん
から聞きながらま
た始終動き回るケ
ンの様子をみなが
ら考えた。お母さ
んは検査を受ける



ことを突破口にして先を見つめていた。私はことばを選びながらゆづくりと言つた。「検査を受けることよりもケンが自分の力を十分に發揮できる場を作つていくことが大切であること、そしてそれはお母さんひとり、家族だけでは大変で、周囲の力をかりていこう、だから検査を受けるのなら今後を考えて地域と関連のある病院の方がいい」と保健所に關わる先生の所属病院を紹介した。同時に地域の児童教室を紹介して見学してみるよう勧めた。地区の保健婦さんに同行してもらつた。ケンは気に入ったようでお母さんは「水を得た魚のようだ」と語つた。出産ぎりぎりまで通つた。しかし出産後しばらくお休みになるのだろうなと思つていた。

弟エイ誕生

エイが誕生しても児童教室へ通うペースは変わ

らなかつた。私自身は出産後はケンがしばらく児童教室を休むのは仕方がないと思つていた。多くの親子がそうであるように家族のライフサイクルの変化が原因でしばらく子どもの生活が変化することは避けられないからだ。しかしケンとお母さんの教室へ通うペースは変わらなかつた。もちろんお母さん一人で乳飲み子を抱えて通うのは無理だ。同じ団地に住むお母さん方に助けられながら通い続けた。相談の日も欠かさずやつてきた。「エイはどうしたの?」とたずねると「ちょうど昼寝の時間だから、三時間は眠るし、隣の奥さん泣き声が聞こえたら見て下さい」と頼んできた。エイは「エイはどうしたの?」とたずねると「ちょうど昼寝の時間だから、三時間は眠るし、隣の奥さん泣き声が聞こえたら見て下さい」と頼んできた。まつすぐ見つめるお母さんの目があつた。私は「エイも大変ね」と笑つた。

まつすぐ、本当にまつすぐ向けられるお母さんのまなざしには他者を信頼し、自分の気持ちをありのままに表現する誠実さと確かさと強さがあ

る。私を含め周囲の者はできる限りお母さんとケンとともにありたいと「ぐく自然に思う。「エイを見ているとますますケンがいとおしくなる。エイがこんな簡単に、さも当たり前のように一つ一つ教えるくても自分の力で吸収し自分のものにしていく。ケンは何年も何年もかけてやっと吸収するのに」とお母さんは語った。

保育園へ

エイをつれて幼稚教室へ通つた次の年、ケンは保育園へ入園した。その保育園でリュウと一緒にクラスになる。リュウのお母さんは転居してきたばかりで知り合いもない。おまけにリュウの子育てにお手上げ状態で保健所の心理相談にやつてきた。パソコン通信が大好きなお母さんだ。リュウのお母さんの話の中にケンのお母さんの話がでてくるようになった。頼りにしているらしい。ケ

ンのお母さんもリュウのお母さんは考えが違つておもしろいという。リュウのお母さんに頼りにされているケンのお母さんの姿。一年前の幼稚教室に通う頃のお母さんは異なる姿だった。ケンとリュウのお母さんの話を聞いて、相談室以外のリュウとケンの姿をみたいと私は保育園に訪ねていった。担任の先生だけでなく全ての先生に声をかけられ丸ごと受け止めてもらつて愛されている一人の姿があつた。先生方の話の中に一人のお母さんの話も自然に語られた。

カナは同じクラスの女の子。「カナのお母さんからお礼を言われた」とケンのお母さんが顔を輝かせてある日話してくれた。「カナのお母さんから『ケンちゃんに優しくしているカナを見てびっくりした。それまで母親の私はカナはひとりっ子でわがまま優しさなんてない子かと思つていた。ところがケンにお世話をしているカナを見



た。本当に感激した。ケンがいたからカナの良さがわかったの。ありがとう」と。カナそしてカナのお母さんにケンがケンという存在が認められてケンのお母さんはうれしかったのだろう。

「ケンがいなければ、私はこんなに真剣に一生懸命生きてこなかったと思う。それまで私なんかいつ死んでもいいと思って人生を投げてきたから」とお母さんは語った。さらに続けた。「ケンによつて多くの人の出逢いがあつた」と。

カナはケンに出逢いケンにやさしく接することを知つた。カナの母はケンの存在によりカナのやさしさを初めて知つた。ケンは様々な人に価値ある人間として認められその存在を大きくしていくた。

就学を次の年にひかえお母さんは教育委員会の

教育委員会との関係

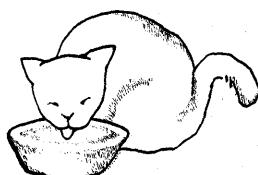
卒園を間近に

ケンは「言葉で表現する」という点では大きな中でのケンの姿を見てほしい。認められ支えられている場で見せるケンの姿を見て欲しい。母の願いが叶い教育委員会の人々が保育園へ見にきた。異例のことだった。帰り際教育委員会の担当者が「勉強になりました。経験で獲得する力がこの子には随分有るのですね」と語つた。

— 62 —

担当者から就学相談を受けた。思いもよらぬケンに対する評価の回答。このときばかりは

「初めてコミュニケーションできない」とお母さんは落ち込み電話をしてきた。『保育園の



壁を持っている。しかしケンが保育の場で發揮する力は想像を超えて大きい。着実な成長を感じさせる。

親子が新たな場で一つ一つ、保健所で児童教室

で団地内で保育園で教育委員会で、彼らを支える関係を作り上げていく過程を見つめてきたからだと思う。母と周囲の人々、ケンと周囲の人々、母とケン、親子と周囲の関係の広がり。その親子の存在が周囲の人たちを一生懸命にさせる。周囲の人たちは一生懸命になることで何かに気づく。そこにはケンの確かな存在がある。単にケンがケンの母が他者から何かを与えられるという一方向的な関係ではなくケンの存在もまたカナにカナの母にリュウに保育者に確かな力を与えている。ケンが価値ある人間として認められた環境があまりにも自然に作られていく。

もちろん親子にとっては大変なすつたもんだが

あつたという。しかしそれを乗り越えてきたお母さんの目もケンの目もあまりに涼しく穏やかだ。

ケンの目

最後に。小学生で夏休みを過ごすケンにあつた。部屋に入ってくるケンの目は不安げだった。「いつも学校へ通う道と違うから不安だった。こんなふうに不安を見せるようになつたのだ」とお母さん。帰る頃にはケンの目の中に大きなたくましさが見えた。おおはしやぎだった。次に出逢うときまた違う色のたぐましさに出逢えることを今から私は楽しみにしている。

(お茶の水女子大学)

編集後記

今月号から、榎沢先生の「現象学から保育の世界を見る」、松本先生の「子どもの生活と福祉の歴史」が始まります。一年間、六回の連載から、私たち大人が子どもと共に暮らすとき、大切にしたいことを一緒に考えてみたいと思います。

*

先月号に原口先生が紹介された『木のいのち木のこころ』の〈人〉を読みました。法隆寺の棟梁・西岡氏の弟子である小川三夫氏の興した鶴工舎の、若き宮大工たちへのインタビューからなるこの巻を読んでいくと次のような言葉に出会います。

「こんなに若い人だけでつくってい

けるんですから、不思議です。
(略) でも実際に出来上がつてみると、ああ、やっぱりすごいなと思いま
すね、鶴工舎は」「仕事をするの
はほくらんですね。そうしたら何
でもできるんですね。(略) 時間は
かかるにしても……」「ここは、俺
たちは未熟で何にも知らないけど、
やるときは納得するまで勝手にやら
せてくれる」などなど。宮大工の技
術に不案内な私にも、鶴工舎で実践
されている「育てる」師と「育つ」
弟子たちの姿が伝わってきます。

やればできることを知つていて任せ
せる者がいる。やってみて自分で自分にも
できることを知る者がいる。「個性
を殺さず、癒を生かす」が小川氏の
モットーだという。あらこちらの言葉
が相手を信じて任せることの意味を
私に語りかけてきました。

(A)

幼児の教育

第九十六巻 第四号
(一九九七年四月号)

定価四六〇円 (本体四三八円)

発行 平成九年四月一日
編集兼発行人 田代和美
発行所 日本幼稚園協会

〒112 東京都文京区大塚二一一一

印 刷 所 図書印刷株式会社
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発 売 所 株式会社 フレーベル館
〒113 東京都文京区本駒込
六一一四一九

☎〇三一一五三九五一一六六二三(営業)
振替 〇〇一九〇一ニ一一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

倉橋惣三選集（全五巻）



倉橋惣三・著

わが国の幼稚教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

-
- ①幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル 定価3,398円（税別）
-
- ②幼稚園雑草 定価3,398円（税別）
-
- ③育ての心・就学前の教育他 定価2,913円（税別）
-
- ④保育案他 定価3,398円（税別）
-
- ⑤児童教育・教師論・児童文化他 定価3,398円（税別）
-

上製本各巻ケース付き B6変型判 416～512頁

キンダープックの
フレーベル館

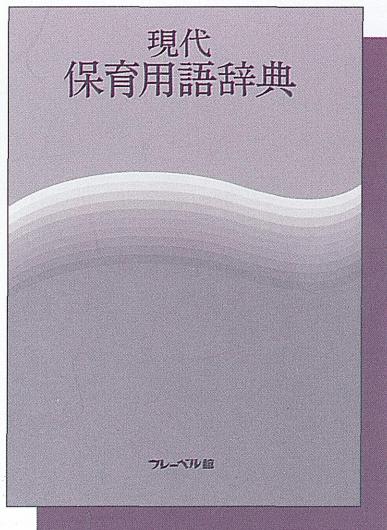
創業90年・キンダーブック創刊70年記念出版

弊社は明治40年、幼児教育・保育への寄与を目指して東京・飯田橋の地に誕生しました。以来、皆様のご支援をいただきながら今年創業90年を、また、昭和2年誕生の「キンダーブック」は創刊70年を迎えることとなりました。この創業90年・創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源『現代保育用語辞典』を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご用意いただければ幸いです。

基本的な保育用語約2,000語を精選、50音順に配列し、解説。

現代 保育用語辞典

付録：外国の保育教育40か国



保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通じて、これから の保育のあるべき姿を分かりやすく示す 辞典。みだし語は英語訳付きで、今の保育に直結する語釈をポイントとし、引き やすく、意味がすぐ確認できる辞典。

編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博
上田礼子・大戸美也子・大場幸夫
小林美実・中村悦子・萩原元昭

執筆者

保育及び隣接分野の
最高権威者330名が参画。

A5判・592頁・定価7,767円(税別)

好評発売中

キンダーブックの
フレーベル館